

主 日 礼 拝 順 序

(待降節第2主日)

12月6日 午前10:15~11:30

司会 津田伝道師

前 奏 片桐聖子姉

招 詞 司 会 者

頌 栄 5 3 9 (起立) 一 同

祈 禱 一 同

交 読 文 2 3 (詩 9 6) 一 同

讃 美 歌 9 4 (起立) 一 同

聖 書 ルカ 14 : 12~14

(共新 137頁/初新 158頁)

テサロニケ I 5 : 16~22

(共新 379頁/初新 438頁)

牧会祈禱 津田伝道師

合 唱 21-235(1,2,3) 聖 歌 隊

説 教 「開かれた食卓」 岩 井 牧 師

讃 美 歌 5 3 6 (起立) 一 同

12月誕生者の祝福 岩 井 牧 師

献 金 一 同

頌 栄 5 4 2 (起立) 一 同

祝 禱 岩 井 牧 師

応 唱 聖 歌 隊

報 告 本城智子執事

後 奏 片桐聖子姉

開かれた食卓

その人たちはお返しができないからあなたは幸いだ。 ルカ 14 : 14

ルカ福音書が書かれた時代には、宴会が社会生活上重要な役割を持っていたことが、14章の宴会の物語にはうかがえる。宴会に招かれた人は、その宴会にどんな人たちが招かれていて、自分がそこに参加する意義は何か、自分のメリットはどこにあるのか、また招き返す社会的意義がどの程度なのかなど、綿密に考えておく必要があったらしい。そして同等な社会階層を越えた宴会というものはなかった。つまり「互惠性のパターン」があり、宴会はそのシステムの維持と強化であった。

ところが、ルカ福音書の伝えたメッセージは、ルカ 4章16節以下によく現わされている。それはイエスがナザレの会堂でイザヤ書61: 1~2を読んだことに始まる。

「主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

そして、「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい」(14章13節)とあるのは、ルカ 4章と符合している。つまり、当時の社会が枠組

として持っていた互惠性(相互に恩恵をこうむるgive and take)の閉鎖性を根本的に問い直したのである。

お返しができるか、お返しができないか、という判断基準ではなく、「主の恵み」(4: 19)が現われているか否かの判断基準への組み替えが実現していることが、宴会の新しい基準なのである。

ルカの時代、街の囲いの外には、皮なめし職人、負債を抱えた人、逃亡奴隷、売春婦、物乞い、外国人避難者など社会的底辺の人々がいた。当時の教会に入信した富裕層の人々は、自分たちの社会的ネットワークを相対化して、イエスが友とした底辺層の人たちにも開かれたネットワークの組み替えを行った。ルカは富の所有を否定したのではなく、何を第一義として、社会のあり方、文化のあり方、つまり交わりを作り出すかを鋭く迫った。

教会はいつの時代にも、その構成員の社会的枠組を担って気づかぬ閉鎖性を負ってしまっていないだろうか。このことについては厳しい自省が必要である。これを破るものは、「お返しができない」人との関わりであろう。その人たちの背後にイエスの存在が見える時、私たちもその人たちを通して救いにあずかるのではないだろうか。(先週説教、岩井記)